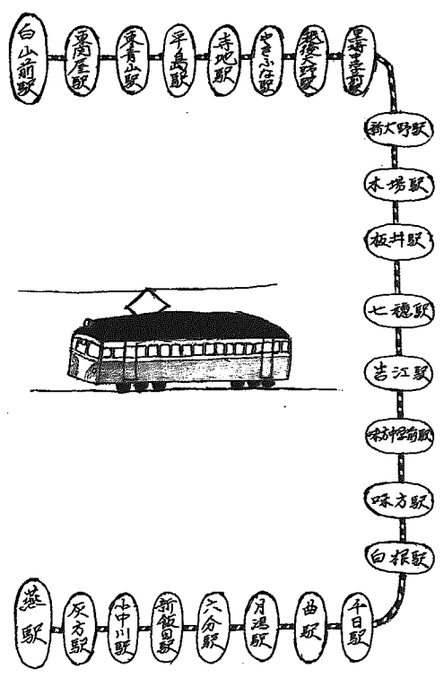
その屋敷は現在、国の重要文化財となっています。また、味方村ができたのは、明治三十四年、国の第二次町村合併が行われた時で、七穂村、白根村、味方村の三か村の合併により今の村となりました。

味方村が何よりも有名なのは、中ノ口川の対岸白根市と、毎年六月初旬の五日間行う大凧合戦です。東軍の白根、西軍味方に分かれて合戦します。東軍は大高組、桜町組、五郎組、役者組、鋼町組、本新蝶組、桃太郎組。西軍は弁慶組、だるま組、謙信組、中蝶組、北若組、一心太助組、日吉丸組の各組が十五枚から三十枚の大凧を作り、約三百枚の大凧が舞い上がり合戦をくり広げます。からまって引き合いになれば電車の上までも綱を伸ばし、見物人も応援して綱を引っ張り、電車の運転士も勝負がつくまで電車を停めて待っており、乗客も大喜びでした。

白根駅

駅舎のすぐ脇に、大凧の絵の看板が二枚立てられています。対岸の白根市には、白根大凧と歴史の館があります。国内はもちろん、世界各国の珍しい凧を集めた世界最大の凧博物館です。館内には凧合戦の雰囲気を味わえる立体映像室や、凧作りを体験できる凧工房、凧揚げ実験室を備えています。また「しろね」の歩みがわかる歴史民俗資料も展示されてあり、遊びながら学べるユニークな施設です。

凧と共に白根で有名なのは、全国に知られる仏壇です。その沿革は、江戸時代の中期、元禄年間に宮大工の初代長井林右エ門が、京都方面からその技術、技法を取り入れて、京形の仏壇を作り、更に自分の手で簡単な彫刻をほどこし、白木仏壇を完成させ、これが白根仏壇の始まりと伝えられています。天明年間には白根独特の技術・技法が生みだされ、木地、彫刻、金具、塗装、蒔絵の五部門に分業化し、完全な産地形成が確立されたのです。その後も先人の努力の積み重ねによって全国にその名を高め、三百年の輝かしい伝統は今にいきづいています。



曲駅

電鉄の開通から一年遅れて、昭和九年十月二十日につくられました。

この曲地区に、観光梨園があります。月潟村は梨の産地として有名で、八月中旬から十二月頃まで、幸水、豊水、廿世紀（にじゅっせいき）、新高、ル・レクチェなどの品種が収穫され、長い期間味わうことができます。有機栽培で管理されていて、味は折紙つきで全国に発送されています。月潟の梨栽培の歴史は古く、文化年間、大別当の深沢剛蔵氏が上総国（かずさのくに）より梨苗「類産」を求めたことから始まります。その原木は、樹齢二百年を誇り、木の廻り二・四メートル、高さ一・八メートル、枝の広がり東西十三メートル、南北に十六メートル、八本の大枝からなり、国の天然記念物に指定されています。堂々とした古木ながら毎年十月下旬には、約四百個の果実が収穫され、実った類産梨は翌年六月頃まで貯蔵できる外、村の業者によって「梨ようかん」に加工されています。

月潟駅

月潟村は明治三十九年四月、秋津（あきつ）村、曲通（まがりどおり）村、中合（なかごう）村の三か村が合併してできました。可愛い子供たちの踊る角兵衛獅子で全国的に有名です。

角兵衛獅子の由来についてこんな説があります。この地域は昔、沼や湿地が多く、毎年のように起こる中ノ口川の氾濫や波堤によって、村人の暮らしは塗炭の苦しみの中にありました。これを憂いた農民角兵衛は獅子舞を創案し、農業の傍らこれを農民に教え込み、諸国に巡業させました。これが角兵衛獅子の始まりと伝えられています。

昔から角兵衛獅子の一党が、技芸の上達、道中の安全を祈願し守護神としたのが、角兵衛地蔵尊です。全国巡業中のすべてが、六月二十三日、二十四日、二十五日と、地蔵尊のお祭りには帰郷して踊りを奉納しました。角兵衛地蔵尊は駅のすぐ隣にあります。

月潟はまた、刀匠の技を伝承する地場産業手打鎌の産地として有名です。その発祥は、江戸時代の中期、天明年間、刀鍛冶であった薄田沖右エ門が農鍛冶に転じたとする説と、文化年間、黒埼の黒鳥から移り住んだ刀鍛冶薄田周平が月潟の手打鎌の始祖ともいわれています。

また月潟には黒埼ゆかりの物が村の文化財となっています。それは月潟村大別当の満徳寺にある経堂と輪蔵です。経堂の構造は重層四柱造といわれ、下層は和様、上層は唐様となっています。堂の外郭上部に刻まれている龍や花鳥の彫刻は県内に見られない程の見事な物です。経堂内にあるたくさんの経文を納めた輪蔵は、一本の真柱の上に立てられ回転する工法で造られ、一回転すると中に納められている数百巻の経文を全部読んだ程の功徳があるといわれています。

この経堂と輪蔵は、数代前まで代々宮大工をしていた黒埼町山田の家号本蔵ろんの先祖が造ったといわれ、天保十二年に建てられた経堂の棟札に、工匠若林本蔵藤原光好と記されており、若林の子孫は現在も黒埼町に健在です。

六分駅

大正十四年の長者番附の上位に名を連ねている六分の山田助作さんの名は、中ノ口川下流の川港、大野町の人たちの間にも、六分のだんな様と広く知られていました。そのだんな様の大邸宅が今も残されているということです。

『新潟交通二十年史』によれば、太平洋戦争も終わりに近い昭和十九年、六分駅の女性駅員前田ミサオさんが、志願して女性第一号の運転士になられました。

男性がみんな戦場に行き、女性が電車を動かした時代があったのです。その前田さんが運転士になったその頃、六分駅の女性駅員として働いていた星嶋ミツルさん。それに当時、六分駅や新飯田駅等で電鉄職員として勤めていた、現中之口村良寛会の会長渡辺四三郎さんも健在です。

新飯田駅

中之口村にある潟浦の地籍に作られた駅で、この電鉄のできる時、大株主の大きな力で駅の位置や、路線が決まったと伝えられています。

中之口村は、昭和二十九年七月、小吉村、道上村と燕市の一部が合併してできました。村域は、新潟平野の南部にあたり、南東境沿いを中ノ口川が北へ流れ、村のほぼ中央を上越新幹線が南北に走っています。野菜、果樹栽培が盛んで、特にハウスブドウの名産地で、至る所にハウスが見られ、ハウスブドウの発祥の地を物語っています。

また、洋食器づくりが盛んですが、戦後、燕の洋食器産業が大景気の頃、この沿線の農家の人たちが大勢燕へ働きに通いました。その頃は、月潟から混み始めた電車が、超満員となって新飯田駅に着き、その混雑ぶりは東京のラッシュ時と同じで、駅には尻押し要員が雇われた程でした。

あの有名な新潟県唯一の横綱羽黒山は中之口村の出身です。

小中川駅・灰方駅

この両駅は、燕市にあります。

燕は、明治二十二年四月の市町村制実施の時、燕町となり、昭和二年太田村を編入。同二十九年三月、小池村、小中川村、松長村を合併してその時から市制が施行されて燕市となりました。

燕は昔から、金物工業の街で、江戸時代の初期、信濃川の氾濫に悩まされた農民たちの副業として、和釘づくりが始められたのが起こりとされています。明治の頃には和針づくりのほかに、花器、茶器、水指し、火鉢といった鎚起（ついき）銅器が造られるようになり、大正初期にはアメリカ、イギリスから洋食器の見本を取り寄せ、伝統の技術を生かして試作に成功。第二次大戦後、ステンレス金属が出てきてから、洋食器造りの街として著しい発展をとげ、現在、全国洋食器生産量の九五％がここで造られ、国内は元より、広く海外に輸出されております。

燕駅

新潟交通電車線は、新潟市県庁前駅を始発に、この燕駅を終点として、国鉄弥彦線に連絡していました。

中ノ口川沿線地域は、明治から大正期にかけ全く鉄道の恩恵から外され、もっぱら中ノ口川を利用する舟航の便だけという、誠に不便な暮らしをしてきました。そんな中、昭和八年、新潟電鉄の電車線、新潟—燕間の開通は中ノ口川沿線住民に、どんなに大きな喜びと希望を与えたか知れません。以来電車は戦前から戦中、戦後と、ほんとに沿線住民の足として大きな役割を果たしてきました。

しかし、時代の流れによる道路の整備改良は、交通体形を大きく変化させ、自家用自動車等の激増をもたらし、その影響はもろに電鉄の大幅な旅客の減少をまねきました。新潟交通ではあらゆる合理化の手を尽くして、電鉄の継続に努めてきましたが、遂に経営難から平成四年三月二十日、白山前—東関屋間二・六キロが廃止され、翌五年八月一日、月潟—燕間十一・九キロが廃止されました。そして、平成十一年四月四日には東関屋—月潟間二十一・六キロ全線が廃止されたのです。

私たちが少年期の昭和初期より、約半世紀以上にわたって中ノ口川沿線住民のために役立ち、大きな役割を果たしてくれた電鉄のことを、永く後の世まで伝えたいと思います。

（終わり）

今回紹介しました「電鉄駅めぐり」は、平成11年12月に自費出版された「電鉄の今昔」を抜粋したものです。

「電鉄の今昔」は、郷土史家の宮田栄門さんが資料や電鉄沿線を取材されたものを、電鉄66年の歴史と沿線市町村の歴史・文化にわけ、B5版46ページの冊子としてまとめたものです。

「電鉄の今昔」について詳しくは、宮田栄門さん（大野2930、☎377—2495）へお問い合わせください。